

景教經典一神論解説

基督教の一派なるネストル教即ち景教が、唐代に支那に傳へられたことは有名な事實で、従つて彼の大秦景教流行中國碑を中心とした研究は殆んど枚擧に違ない程發表せられて居る、此等の研究の結果が證明する如く、會昌五年（八四五）佛教を初め諸宗禁絶の厄難が起る迄は、景教も相當に上下の信仰を博したものだと思はれるが、それにも係はずその漢譯の經典の類の今日に傳はつて居るものは殆んど無く、僅かに先年佛蘭西のペリオ氏が敦煌の佛洞から發見せられた景教三威蒙度讚と尊經との短かい二篇が、實に此の間にあつて唯一の資料といふべきであつた、この尊經といふのは景教碑文の撰者として有名な景淨、本名 Adam なる人が漢文に翻譯した三十部の經名を列擧したもので（羅振玉氏發刊の燉煌石、室遺書中に收めてある）、中には景教の經文とは考へ得られないものも見えて居るが、その大部は勿論此の教の經名である、此の尊經の跋文の外にも、景教碑に「翻經書殿、問道禁闡、」また「翻經建寺」と見ゆる如く、景教經典は隨分多く唐に輸入せられ且つ翻譯せられたもので、従つて尊經中に擧げられたものゝ外にも、漢譯せられたものは少からずあつたと思はれるが、禁絶の災厄は所謂三夷の教の經典にも平等に及んで、遂に威な共に滅びてしまつたのは、あまりに儂ない最期である、先年敦煌から發見せられて學界を驚かした漢文の波斯教殘卷一篇（國學叢刊第二所載）は、基督教の分身ともいふべき摩尼教の教義を説いた重要な經典で、これに因りて唐代に於ける此